

別紙（事後評価書）

平成31年度文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）

<p>通し 番号</p>	<p>1</p>	<p>事業分野：共同制作支援事業 助成対象団体名：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）</p>
<p>助成対象活動に関する評価</p> <p>（妥当性）</p> <p>東京芸術劇場が中心となり、白河文化交流館コミネス（福島県白河市）、金沢歌劇座（石川県金沢市）が参加して、「ラ・トラヴィアータ（椿姫）」（ヴェルディ作曲）を共同制作・上演した。このプロダクションは演劇的アプローチに重点を置いている点と、東京芸術劇場のコンサートホールでの上演が前提となっている点の2つの特徴を持つ。音楽面にはオペラに実績のある指揮者、オーケストラ、ソリストを配することで、音楽・演劇両面のバランスが図られている。</p> <p>企画の初期の段階から3館が参加して制作会議を開催し、それぞれの館が制作業務を分担し責任ある制作体制の構築、各館の制作業務の実績作りに加えてプロダクションへの参加意識の醸成が図られている。</p> <p>共同制作の場合は幹事館で公演初日を開けることが多い中、当プロダクションは白河文化交流館コミネスで公演初日を開けた。白河のホール関係者にとってはまたとない貴重な現場経験をすることになり、地方における劇場運営の体制強化を促す面でも効果的であった。</p> <p>以上のことから、共同制作の意図や役割分担など事業が適切に組み立てられていたと認められる。</p> <p>（有効性）</p> <p>参加ホールそれぞれがメインとなる制作業務を分担し、プロダクション全体に責任をもって関わるというやり方は協力体制の構築、劇場としての機能強化など、効果的な面が認められる。また、公演地の合唱団などを出演させるという、ある意味非常に手間のかかることを実施することも、参加意識の醸成に留まらず、地方における劇場文化の活性化にもつながっていくことが期待できる。2009年から継続している「全国共同制作プロジェクト」が、地域のホールが創造活動を行い、市民に還元するというシステムを構築する上では効果があったと認められる。</p> <p>また、入場者数・入場者率・収益率も目標を達成しており、有効性が認められる。</p> <p>（効率性）</p> <p>事業はほぼ計画通り実施されており、事業期間は適切であったと認められる。</p> <p>また、事業費については、要望時の予算額と報告時の実績額とを比較すると、一部の費目に増減があったものの、ほぼ計画通り執行されており、適切であったと認められる。</p> <p>（創造性）</p> <p>このプロダクションの特徴の一つが、演出面からのアプローチに重点を置いた創造活動である。要望書の段階ではスーパー歌舞伎の演出家杉原邦生を起用する計画だったが、その後ダンス系の矢内原美邦に変更されたことでも明白である。変更理由は稽古スケジュールの調整がつかなかったとのことだが、変更の理由としては些か希薄である。このプロダクションが演出面からの新しいアプローチによる既存のオペラを超えるプロダクションを目指すものであること</p>		

を考えれば、尚のこと釈然としないものが残る。

矢内原の演出は、“スケープゴート”をキーワードにテキストを読み替え、ダンス系の演出によく見られるように、映像やダンサーを大胆に使い、色彩的にも鮮やかな舞台作りにも果敢に挑戦した。四つに分割される自立のセットを場面に合わせて回転やスライドさせて組み合わせることで、変化に富ませる工夫がなされ、予算の制限や各会場の特性を踏まえた合理性が見られたが、このオペラが内包する、男女の愛、親子の愛、女性の悲劇といった人間の内面を描き、それを現代社会が抱える諸問題として浮き彫りにする力強さ、深さを持つまでには至らなかった。一方、指揮者ヘンリク・シェファーは誠実に音楽を纏め、オペラに経験豊富な管弦楽、ソリスト陣の歌唱と共にスムーズな音楽の流れを作り、音楽的安心感を与えることに貢献した。公演初日直前にヴィオレッタ役に予定されていたエヴァ・メイが来日不可能というアクシデントに見舞われたが、急遽代役として来日したエカテリーナ・バカノヴァは魅力的な演唱を披露した。他にはアルフレード役の宮里直樹は立派な声で、ジェルモン役の三浦克次はベテランらしい味で共に音楽的な成果に貢献した。

以上のことから、3つの劇場の国内における評価の向上に一定程度つながったものと認められる。

（総評）

当該共同制作「ヴェルディ歌劇『ラ・トラヴィアータ』（新演出）」は、妥当性、有効性、効率性、創造性において概ね適切であったと認められる。